

2026 JUA/EAU Academic Exchange Programme 参加報告

田中 勇太朗（名古屋市大）

このたび、JUA/EAU Academic Exchange Programmeにご選出いただき、2026年3月6日から17日の12日間、イギリスのロンドンとニューカッスルを短期留学させていただきましたので、ご報告いたします。今回、日本からは名古屋大学の木村友和先生と私の計2名が参加し、台湾から3名、韓国から2名の先生方が参加され、総勢7名でプログラムに参加しました。

日本からの長時間フライトを終えてヒースロー空港へ降り立つと、3月のロンドンは灰色の雲に覆われ、冷えた湿気に細かな雨が降っており、英国に到着したことを実感しました。到着翌日早朝から University College London Hospital (UCLH) における Prof. Tamsin Greenwell 先生主催のセッションが始まりました。UCLH はロンドン市内でも最大級の病院であり、年季の入った建物を胸部外科と泌尿器科の2科で共有しているという、いかにも英国らしい歴史の重みを感じさせる施設でした。今回のプログラムの最大の特徴は、英国における女性泌尿器科・機能再建泌尿器科の第一人者である Greenwell 先生のもとで学べる点にありました。初日は朝から夕方まで、アンドロロジー、神経泌尿器科、男性尿道再建、骨盤底機能障害など、本邦ではなかなか触れる機会のない分野が次々と展開されました。特に Greenwell 先生と Daniela Andrich 先生による再建泌尿器科の講義では、尿道狭窄に対する手術戦略の一つ一つに高度な判断が求

められることを教えていただき、その病態の難しさを痛感する場面が多くありました。その日の夜は Greenwell 先生のご案内で St Martin-in-the-Fields 教会に赴き、ヴィヴァルディの「四季」を生演奏で聴く機会をいただきました。歴史を感じる教会内に弦楽が響き渡るその空間は、英国の文化的な厚みをひしひしと感じさせてくれました。（写真1）

8日の朝、ロンドン・キングスクロス駅からイーストコースト本線でニューカッスルへ向かいました。英国北部は緑豊かでありながらどこか荒涼としており、駅を降りると風が一段と冷たく感じました。到着後は、中世の修道院を改装した Blackfriars レストランを会場とした学術セッションが行われました。石壁に囲まれた空間で尿路結石や前立腺癌について議論するという独特な環境であり、非常に印象に残りました。私が専門とする尿路結石については、Prof. Christopher Harding 先生より実践的な講演をいただき、英国と日本の治療適応の違いや患者選択の考え方について意見交換をすることができました。特に印象的であったのは、英国では手術待機時間が長いことから、ESWL が第一選択となる場面が多い点でした。NHS 医療制度や手術待機時間といったシステムの違いが、治療選択そのものに大きく影響している点は、日本との違いとして非常に示唆に富むものでした。セッション後にはウイスキーテイastingやパブを訪れ、各国の参加者と交流を深めることができました。文化や言葉の壁を感じることなく交流できたことも印象に残っています。（写真2）



写真1 St Martin-in-the-Fields 教会前での Prof. Tamsin Greenwell 先生と EAU メンバーとの集合写真



写真2 Prof. Christopher Harding 先生による講義受講後の写真

ニューカッスルでの研修を終え再びロンドンへ戻り、11・12日はUCLHでの臨床日となりました。外来・手術の中から参加者の希望に応じて見学先を選択でき、私は、日本では症例機会が少ない手術（Graft urethroplasty・Peyronie surgery・Penile implant revision）を見学しました。中でも陰茎再建術の第一人者として知られているProf. David Ralph先生の手術は機能温存と整容性を両立した極めて洗練された手技であり、海外から多くの泌尿器科医が見学に訪れていました。今回、高度再建手術を体系的に学ぶことができ、臨床技術および治療戦略に対する理解を深める貴重な機会となりました。12日夜にはNational Portrait Galleryのツアーがあり、著名な肖像画を通して英国の歴史や文化に触れる機会を得ました。医療とは異なる視点からの学びが、本EAU主催のExchange Programmeに奥行きを与えていたと感じています。

3月13日からはEAU26 Annual Congressが開幕しました。前日までのプログラム期間中は朝8時から夜10時過ぎまでスケジュールが詰め込まれた非常にタイトな日々が続いており、体力的にかなり消耗していましたが、学会が始まると、関心のあるセッションを自由に選べ、久しぶりに一息つくことができました。EAUがロンドンで開催されるとあって、会場は世界中から集まった泌尿器科医の熱気に包まれていました。今回のEAUでは、JUA-EAU Joint Sessionにおいて、Stones分野の講演者とパネリストとして登壇する貴重な機会をいただきました。学会期間中にJUA/EAU Academic Exchange Programmeの修了証を受け取り、最終日の夜は恒例のタキシード着用のEAU President's & International Friendship Dinnerがあり、12日間にわたる緊張がほどけていくのを感じました。（写真3）

今回のプログラムを通じて、学術的な内容については前述の通り多くを学ばせていただきましたが、加えて日本と英国での医療全体の違いを強く実感しました。専門性の深化と地域医療への貢献の在り方は、日本と英国で



写真3 EAU President's & International Friendship Dinner での集合写真

大きく異なっていました。この違いは単なる制度の問題ではなく、両国における価値観や宗教、文化的背景の違いに根ざしたものであり、それぞれの社会において必然的につくられたものであると感じました。また、台湾・韓国の同世代医師との交流を通じて、国際的な視点から泌尿器科医療を捉えることの重要性を改めて認識しました。

このような貴重な機会を与えてくださいましたJUA・EAUの関係者の皆様、ご推薦いただいた安井孝周教授、プログラムを通じて親身にご指導くださったGreenwell先生・Harding先生をはじめとする現地の皆様、そして快く送り出してくださいました名古屋市立大学泌尿器科の皆様に、心より御礼申し上げます。本プログラムで得た学術的知識、国際的視野、そして人とのつながりを糧に、今後の臨床・研究・教育に邁進していきたいと思っています。